

和の文化 広めたい

守谷あゆ美さん (諏訪) きものグランプリ



元は母親の訪問着を着て、「きもの日本グランプリ」出場への思い、受賞を語る守谷あゆ美さん＝長野日報社本社

日本の伝統文化「着物」を広く世界に発信することを目的とした「第2回・きもの日本グランプリ」(同大会実行委員会主催)に、諏訪市在住の現代歌人協会会員の守谷あゆ美さん(54)が出場、50代の部でグランプリを受賞した。スピーチも重要視されるコンテストに、長年取り組む短歌への思いを語り、着物姿と共に評価された。「これまでの人生は着物と作歌に救われたことが多々あった。今後より親しんで、日本文化を広めることを意識していきたい」としている。

(宮坂早苗)

50代の部 短歌への思い語り 共に評価

守谷さんは20歳のころ、口語短歌誌「未来山脈」を主宰する光本恵子さんと出会い、短歌の世界を知った。以来、自分を活字にしていこうことに夢中になり、詠み続けている。一方、20年ほど前からは難病を患い、その中で夫と共に3人の子どもを育ててきた。

大会出場は、幼い頃から着物姿の母に憧れ「自分も着ることで心も体も凜とし、強さと癒やしを与えてくれた」と着物への愛着や、今春、三男も他県へ進学したことなどがきっかけ。大会は3月に大阪市のリーガロイヤルホテル大阪で開かれ、書類選考から選出された30～60代の23人が年代別に出場。日々の生活から会得した知恵や所作、社会貢献の意識も選考対象となり、50代の最高賞を受賞した。

当日の着物は、成人式にあつらえてもらった振り袖を訪問着にリメイクした思い出の

一枚。ステージ上でランウェイ。続いて作歌が縁で着付けを習い、着物への関心が強まった経過、自分にとっての着物パワーの偉大さをスピーチ。最後に「振袖に赤やピンクの

花が咲く、娘に込めた母の祈りよ」を披露した。

守谷さんは「病に心が折れそうになった時も家族や周囲の人たち、そしてライフワーカーに助けられてきた」と感謝。

「コンテストは通過地点として捉え、光本先生の教えを自分なりに次代に伝え、これからも活動の節目には積極的に着物を着こなししていきたい」と話している。